

**第 1 回会議（平成 30 年 6 月 12 日開催）における各委員
からの発言内容について（抜粋）**

発言者	内容（抜粋）
福井会長	<p>各委員は、医療的ケア児に様々な立場から関わっているの で、その情報を出し合って、課題を共有していくことが重要である。 拙速に何かを決めるというよりも、自分たちが札幌市で何が できるか、最初に何かから手をつけるべきかに行き着くために、様 々な意見を継続的に聞かせてほしい。</p>
多米委員	<p>自分が小児科医になった昭和 62 年頃は、新生児の医療が発達し た時期であったが、上手くいった例ばかりではなかった。</p>
土島委員	<p>2015 年から、北海道で小児などの在宅医療拠点事業が開始とな り、補助事業者として活動させていただいた。北海道全域で小児 の在宅医療の仕組みを作り、保健、医療、福祉、教育、保育などの 連携体制を構築して、医療的ケア児を支えるという事業である。 10 年以上、札幌で医療的ケア児に関わってきているが、様々な 分野で問題があると思う。</p>
御家瀬委員	<p>北海道看護協会の中の医療的ケア児に関するプロジェクトで は、関係機関の相互ネットワークの重要性、コーディネーターや 中心となる基幹施設の必要性が課題として挙がっている。</p>
今野委員	<p>アンケートの結果、多くの重症心身障がい児（医療的ケア児を 含む）が、放課後等デイサービスを利用したいと考えていること が分かった。</p>
射場委員	<p>相談を受ける中で、「何をどこに相談してよいか分からない、窓 口がどこか分からない」という声を聞いている。コーディネーター の養成が始まる中で、相談員も知識を付ける必要がある。 医療も大切だが、子どもなので、遊び、保育、教育など、子ども 同士の中での育ちの支援、発達支援をどうしていくかについても、 この検討会で話し合っていきたい。医療的ケア児の母は、母であ ることよりも医療従事者に近くなってしまうと感じる。</p>
真鍋委員	<p>医療的ケア児を受け入れている保育所は非常に少ない。 通常の保育を行っている中で、医療的ケアを継続的に行えるよ うな体制を組むことは非常に難しい。危険を伴うことを承知の上 で受け入れることは、ハードルが高い。また、保育所は、貧困、虐 待、保護者支援、保育士不足など、様々な問題もある。 自分としては、積極的に、インクルーシブな保育を進めていき たい。もっと、医療的ケア児が自然に受け入れられるようになって ほしい。 医療的ケア児と一緒に生活をしたことがないということが、受 入れのハードルを高くしていると感じる。実際に、一緒に過ごし</p>

	<p>てみると、「そんなに構えなくてもいいんだ」と思っていたことが多いが、このような機会がないのが現状である。</p> <p>保育所において、医療的ケア児などの障がいのある子どもの受入れが進むようにするためには何が必要なのか、一緒に考えていきたい。</p>
時崎委員	<p>12年間、自分の人生のほとんどを費やして、必死で子育てしてきた。毎日の生活も大変だが、学校の付添いも大変である。この検討会に参加するのも大変だった。</p> <p>少しでも医療的ケア児のこと、自分たちの生活のことを少しでも助けてもらったり、理解していただけると嬉しい。</p>
筒井委員	<p>昨年の母子保健事業を通じて把握できた医療的ケア児の実人数は、284人（この中から、成長ホルモンや糖尿病の自己注射を除いた数は、192人）。把握後は、面接や家庭訪問などの支援を行っている。</p>
矢ヶ崎委員	<p>在宅医療に係る人材育成や提供体制の構築を進めているが、高齢者に比べて、医療的ケア児の部分には入っていない現状。小児の救急医療体制の整備についても、医者の確保が課題になっている。</p> <p>レセプトデータを基にした推計によると、札幌市内の医療的ケア児の数は、250人から300人程度であった。</p>
堀井委員	<p>本年4月に報酬改定があり、決して十分とは言えないが、障害児通所支援事業所において看護職員を追加で配置した場合の加算が設けられ、また、医療的ケアのため外出できない子どもを対象とした「居宅訪問型児童発達支援」というサービスが創設されるなど、国においても医療的ケア児に対する支援の充実が図られている。</p> <p>札幌市では、今年度、医療的ケアに関わる研修会を実施する予定である。また、北海道でも、類似の研修が開催される予定であり、情報交換などの連携を行いながら実施していく。</p>
宮野委員	<p>札幌市では、医療的ケアの必要な重症心身障がい児者を受け入れるため、看護師の人件費、医療・介護機器の購入費、施設改修費などの一部を補助する事業を実施している。</p>
星野委員	<p>市内では、多くの保育所が、障がい児を受け入れているが、真鍋委員からも話があったとおり、若い保育士が多い、研修会に参加できないほど残って仕事をしているなど、保育所の現状は厳しい。障がいのない子どもと一緒に集団保育することで、その子が伸びてくるという成果を感じている。</p>

田村委員	<p>昨年度、国で、保育所の受入れに係るモデル事業を始めたところである。保育所に預けたいという保護者のニーズを満たしつつ、保育所としても、この状態だったら安心して預かりができるというような制度設計を考えていきたい。</p>
及川委員	<p>市内の医療的ケア児について、平成 29 年度は、小中学校で 14 人、特別支援学校で 40 人となっている。</p> <p>学校は教育の場であり、あくまで生徒に対して学力を伸ばしていくという観点で制度が設計されており、医療的ケア児の支援という観点で、支援が届くような仕組みには、なかなかないという実情があるかと思う。</p>
後藤委員	<p>昨今、学校に関わる様々な問題について、学校の教員だけでなく外部人材の登用を進めているが、医療の分野については、関わり方が少し薄い。今後は、医師、看護師などどのように関わっていくのがよいかということについて、教育委員会でも喫緊の課題と感じている。</p> <p>一部の特別支援学校では、看護師が配置になっているが、まだ需要としてはあると思う。</p>
加藤副会長	<p>自立支援協議会子ども部会では、医療的ケア児について、様々なタイプがあり、様々な困難を抱えているという話が出ている。</p> <p>これまで、子どもたちが、親御さんのケアだけでなく、友達などの様々な人と関わって育ち、逞しくなっていく姿を見てきたが、医療的ケア児は、医療的ケアがあることを理由に、学校などに行っても親御さんと離れられない現状がある。</p> <p>札幌市の子どもたちが、どこでどんなふうにも生まれてきても、生き生きと育っていける、「札幌市は良い街でしょう」と言えるような、「子育てに良い街ですよ」とみんなが言えるような、そのようなことを目指していきたい。</p>
福井会長	<p>養護学校で校長などをしていたが、ここ 20 数年前くらいから、非常に障がいの重たい子どもの数が多くなってきている印象を受ける。</p> <p>少しずつ制度が構築されてきて、できるようになったこともあるが、まだまだ、手が届かない部分もあり、十分とは言えないと感じている。</p>